

Title	『嶺外代答』の麻離抜国と乳香・(一)
Sub Title	The country of Ma-li-pa (Mirbat) and Ju-hiang perfume (Milky Incense)
Author	池永, 佳昭(Ikenaga, Yoshiaki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1978
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.48, No.4 (1978. 3) ,p.27(363)- 42(378)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19780300-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「嶺外代答」の麻離拔国と乳香・(一)

池 永 佳 昭

目 次

- 一、序
- 二、「嶺外代答」の本文
- 三、宋代を主とするインド洋貿易路
- 四、むすび

一、序

『嶺外代答』は南宋の初め、孝宗の淳熙五年(一一七八)に周去非によって著わされた。周去非は字を直夫と云い、浙江永嘉(温州)の人で、孝宗の隆興元年(一一六三)進士の試験に乃第し、淳熙の初め(一一七四—一七七年頃)広西桂林に通判(権知州事の輔佐役で、州の政治を監督する官。宋代に置かれた。)の任にあつた人という。そして周去

非が桂林在任中、任地で見聞した百般の事物に就いて書き留めておいたことがこの書物の基礎になつたのであろう。

『嶺外代答』の麻離拔国と乳香・(一)

その後任満ちて郷里に帰ると、友人等から西方辺境の奇事異聞に就いての質問があり、初めは一々応酬していたが、遂にその煩に堪へなくなり、范成大の『桂海虞衡志』(一一七五年)を本とし、二百九十条を書き上げたといふ。「嶺外」とは五嶺の外、すなわち現在の広東・広西地方のことである、「代答」とは質疑に代へるという意味を示している。この書は宋末までは知られてをり、南宋、趙汝适の『諸蕃志』(一二二五年)などにも多分に引用されたが、後世に伝わったものは明初の編纂『永樂大典』に収録されたものといふ。これが「四庫全書」に收められ、次いで之を覆刻したもののが鮑廷博の『知不足齋叢書』第十七集に編入され世に広がるようになつた。⁽¹⁾

本稿(一)・(二)では『嶺外代答』(卷三)外国門下、大食諸国(アラブ諸国)の条にある「麻離拔国」の条全文から

(一)・廣東——麻離拔間の貿易航路、(二)・乳香の產地といわれる麻離拔国の貿易地としての役割や乳香と乳香樹について、の二点を主として考察してみようと思う。(一)について

は本稿で述べ、(二)は次稿『『嶺外代答』の麻離拔国と乳香・

(二)』(以下次稿とする)で考えてみたい。貿易航路については宋代を中心と考えた。『嶺外代答』の版本は、辛酉(中華民国十年、一九二一年)七月上海古書流通処借呉県許氏藏本景印本『知不足齋叢書』(興中書局印行)によつた(許氏藏本の表題は嶺外代答を作る)。

本稿(一)と(二)を恩師松本信広、前嶋信次両博士に捧げたい。

一、『嶺外代答』の本文

『嶺外代答』卷三、外國門下の大食諸國の條、麻離拔國

の全文は次の通りである。

(A)、有麻離拔國。廣州自中冬以後發船。乘北風行約四十日

到地名藍里、博。買蘇木、白錫、長白藤、住至次冬。再乘東北風六十日順風方到。

(B)、此國產乳香、竜涎、真珠、琉璃、犀角、象牙、珊瑚、

木香、沒藥、血竭、阿魏、蘇合油、沒石子、薔薇水等貨皆大食諸國至此博易。

(C)、國王官民皆事天。官豪皆以金線桃花帛纏頭。搭項以白

越諾金字布為衣、或衣諸色錦、以紅皮為履、居五層樓、

(D)、食麵餅、肉、酪。貧者乃食魚、蔬。地少稻、米。所產

果實甜而不酸。以蒲桃為酒。以糖煮香藥為思酥酒。以蜜和香藥作眉思打華酒、暖補有益。

(E)、以金銀為錢。巨舶富商皆聚焉。

(F)、哲宗元祐三年(一〇八八)十一月大食麻囉拔國遣人入

貢、即此麻離拔也。

三、宋代を主とするインド洋貿易路

本稿では(A)、(B)、(F)を中心に考察し、(B)、(C)、(D)は次稿で考えてみたいと思う。

(A)、廣東——藍里間の旅程

まづ(A)によると「麻離拔 Ma-li-pa 国に行くには、廣東を中冬以後に出航し、北風に乗り「南に」四十日航海する」と藍里 Lan-ri に到着する。その地で交易する。「すなわ

ち」蘇木、白錫、長白藤を賣い、次の年の冬まで滯在する。

再び「今度は」東北の風に乗り六十日間順風で航行し麻離拔國に至る。といふことである。

藍里國は『諸蕃志』では藍無里 Lan-wu-li 國となつており、「藍無里國、土產蘇木、象牙、白藤。國人好弓箭殺人、多者帶用。藥箭(毒矢)。北風一十余日到南毗 Nan-p'i (Malabar coast)⁽²⁾」と説明してゐる。藍里、藍無里國は明の『瀛涯勝覽』の南洋里國のひとつ略記、十三半紀のマルコ・ポーロ『航路』の南洋里國のひとつ略記、十三半紀のマルコ・ポーロは Lanbri 國に蘇木 Brazil-wood が多ることを伝えていふ。また、九世紀のアラブ地理学者イブン・フルダード⁽³⁾によれば Rāmi の島と言え、蘇木 baqqam の根は生命をうけいしらぬやうな力⁽⁴⁾、毒を消す力があると言つてゐる。同じく九世紀の『中國のインダ物語』は al-Rānni (Lambri) と伝えてゐる。スマトラ島西北端地方を示したものであらう。『諸蕃志』によれば藍無里國は藍籠國 Kién-pi から水路で五日の所にあると云う。すなわち、藍籠國の條に、

藍籠國、其國當路口、船舶多泊此。從三仏齊 (ペレンバ
藍籠國、其國當路口、船舶多泊此。從三仏齊 (ペレンバ

『嶺外代答』の麻離拔國と乳香・丁

ノ地方) 国風帆半月可到。旧屬三仏齊。後因爭戰遂由立為王。土產白錫、象牙、真珠。國人好弓箭殺人、多者帶符標榜、互相誇詫。五日水路到藍無里國。

とある。これによると、藍籠は三仏齊から水路で十五日ばかりの所にある。ヒルム、ロックヒル両氏はこの地藍籠をジャンビの國 Kampar に比定され、藤田豊八博士は『鄭和航海図』の占必港 Djambi の西にある占巴港を Kampar とすれば、「南路」の西方に位置する占杯港を Kampei (Peureulak の東) すなわち「藍籠」國に比定された。⁽⁶⁾ パンバンから「風帆半月可到」と書いたのであるから藤田博士の説がいよいよに思える。やつするとトメ・ジンベ『東方諸國記』のカンペル占國 Campar が藍籠國のひとつではないか、『鄭和航海図』の占巴港に比定されるかも知れない。

三仏齊 (Palembang) から藍籠國 (Kampei) までは約十五日間の航行であったが、それでは広東から三仏齊まではどうくらいの航海であつたろうか。三仏齊國は唐代の史料では室利仏逝國として伝えられた。室利仏逝はマレー語碑文に述べてある Crivijaya の対音と思える。碑文は五

つ発見され、三つはペレンバンの近くで、一つは Batang

一月八日、方達耽摩立底国。即東印度之海口也。

Hari 河上流の Karang Brahi で、最後の一つはバンカ島の Kota Kapur で発見された。それらによると六八三年にパレンバンに仏教王国が存在し、ジャンビのヒンターランドとバンカ島を征服し、ジャワに対しても遠征軍の準備をしていたという。⁽⁹⁾ 室利仏逝についての正しい知識を中国に紹介したのは義淨が最初だと思える。⁽¹⁰⁾ 義淨がインドへ出発したのは咸享二年(六七一)三十七才の時で、彼の『大唐西域求法高僧伝』卷下⁽¹¹⁾に、渡天についての記述がある。曰く、

未隔両旬(広府から)果之仏逝。經停六月漸學じやくまなう聲明
Śabdavidyā, 音韻、文法、訓詁の学)。王贈支持送往末羅
瑜今改為室。復停兩月転向羯茶。至十二月擧帆還乘王舶漸

向東天矣。從羯茶北行十日余至裸人國……從茲更半月許望西北行。遂達耽摩立底國。即東印度之南界也。……また、同じく義淨の『南海寄歸内法伝』卷四に曰く、

遂以咸享二年(六七一)十一月、附舶廣州、擧帆南海。緣歷諸國、振錫(シャク杖)西天。至咸享四年(六七三)

義淨は六七一年十一月に廣東を出航したが、廣東で「與波斯(ペルシア)舶主期会南行(前掲、高僧伝、卷下)」と言っていることから考へると、あるいはペルシャ人所有の船で南行したのかもしれない。義淨は廣東から仏逝国(都はペレンバン)に至ったが両旬(二十日)からなかつた

といふ。仏逝国に六ヶ月滞在して仏教を学んだ。国王は義淨を支持してくれ、西方に位置する末羅瑜(マラユ)国まで送ってくれた。末羅瑜国に二ヶ月滞在し、コースを転じて(北の方に取る)、マレー半島南部の羯茶国に向つた。羯茶は賈耽の『道里記』(『新唐書』卷四十三所収)の「箇羅國」のことと思え、九世紀のアラブ地理学者イブン・フルダードベーの Kilah の島のことであろう。⁽¹³⁾

それから義淨は咸享三年(六七二)の十二月に王舶に乗つて羯茶から東天竺(ガンヂス河口)に向つたといふ。この王舶は「還乘王舶」と言つてゐることからすると、仏逝国官船ではなかつたろうか。もしもそうだとするとならば、↑仏逝↑羯茶↑東天竺のルートで仏逝舶もかなり多く利

用されていたのであろう。たとえば同じく『大唐求法高僧伝』卷下、無行禪師の条の

東風汎舶一月到室利仏逝國。國王厚禮特異常倫。……後乘王舶經十五日達末羅瑜洲。又十五日到羯茶國。至冬末轉舶西行……

という一文からも推定できる。

義淨は東天までの途中、裸人國に至つたとあるが、たぶんアンダマン諸島のことであろう。裸人國から西北行十五日ばかりで、東印度の南界、耽摩立底國（五世紀の法顯『佛國記』多摩梨帝國⁽¹⁴⁾）に至つた。法顯の頃は東天地方はグプタ朝の時代であったが、七世紀の vardhana 朝の時代も貿易地として栄えていたようである。たとえば義淨（前述、高僧伝、卷下）に「商人数百詣中天矣。……」と記していることからわづかがえる。

(1)、藍里——故臨間の旅程

『嶺外代答』（卷二）、故臨國の条に次の二文がある。

故臨國 Ku-lin 與大食國相連。廣舶四十日到藍里、住冬。次年再發舶約一月始達。……其国有大食國蕃客寄居甚多。

『嶺外代答』の麻離拔國と乳香・^ト

……監寑國遽年販象・牛。大食販馬前來此國、貨壳。國王事天、尊牛、殺之償死。……中國舶商欲往大食、必由

故臨易小舟而往。雖以一月南風至之、然往返經二年矣。

故臨はインド南部西岸の Quilon に位置し、次章で引用する九世紀のアラブ史料『中國とインド物語』（通称スマーランの旅行記）の Koulam-Malaya (or Kulam-Male⁽¹⁵⁾) のことと思われる。この文によると広州舶は四十日で藍里に至り、次年出航し、約一ヶ月で故臨に至るという。本文(A)では藍里から六十日で麻離拔國に至るとあつたが、この場合もしも故臨に寄港後、麻離拔國に向つたとするならば、

故臨——麻離拔間は二十日間といふことになる。麻離拔國はアラブ諸國の中の一國で、本文(B)には「此國產乳香」とあつた。乳香 frankincense については次稿で述べる予定であるが、アラブ諸國で乳香が産出するのはヒルト、ロッタヒル両氏がすでに述べられているようにアラビア南岸の Hadramaut 海岸地方で、麻離拔國はその地方の Merbat のことと思える。⁽¹⁶⁾ 現在の地図によると Oman 國 Dhofar 地方の Mirbat にならう。本文(A)を見ると藍里からアラ

ビア南岸の麻離抜までの直行路を示したのか、あるいは故臨等で一時寄港しその後至ったのかは不明であるが、当時故臨国はマレー諸島とアラブ諸国間的一大中継貿易港であつたと思えるので、まづ寄港するのが一般的ではなかつたらうか。

故臨国には（代答、故臨国の条）大食国の大食國の貿易商人が非常に多く寄居していたという。また、故臨国へはスマトラ島の監鏡國（Kampei 港）から毎年象と牛の販売にやって来たといふ。そしてアラブ諸国からは馬の販売が積極的に行なわれたようである。故臨国の繁栄については南宋『諸蕃志』にも記述がある。いわく、

故臨國自南毗 Nan-p'i 舟行順風五日可到。泉州四十余日到藍里、住冬。次年再發一月始達。土俗大率與南毗無異。……交易用金、銀、錢。以銀錢十二準金錢之一。地暖無寒。每歲自三仏齋、監鏡、吉陀 Kitō 等國發船。博易用貨亦與南毗同。大食人多寓其國中。……

南毗（マラバール海岸地方）国については『諸蕃志』卷上に「南毗國在西南之極。自三仏齋便風月余可到」と言

い、南毗國の屬國の一國に故臨國を上げてある。⁽¹⁷⁾

このように『諸蕃志』から考へても故臨國にはアラブ商人が多く住み、中継貿易港として栄えていたようだ、三仏齋、監鏡、吉陀（マレー半島のケダーデ方⁽¹⁸⁾）等のマレーヨー諸島諸國からも商船が毎年交易にやって來たといふ。また、インド東岸コロマンデル海岸地方に行くのにも、まづ故臨国に行き、そこで舟を乗り換えて行つたようで、『嶺外代答』（卷一）、注輦國の条には、

注輦國 Chu-lién (チロマンデル海岸、Kanchi, Conje-veram, Chola 國) 是西天南印度也。欲往其國當自故臨國易舟而行。或云蒲甘 Pagān (ビルマ地方) 亦可往。……と述べてある。また、十三世紀のマルコ・ポーロは東地中海諸國からもキーロンにやって來たことを伝えている。いわく、

この國 (Coillam⁽²⁰⁾) へは Manji (中國)、アラビア、レバント（東地中海諸國）から各自の船でやって来て大きな交易を行つてゐる。すなわち、彼らは自分の國から商品を持たらし、そしてこの王国から商品を彼ら自身の船に

積載し、帰国するのである。⁽²¹⁾

十二世紀の『嶺外代答』の時代も十三世紀のマルコ・ポーロの頃と同様ではなかつたろうか。『嶺外代答』や『諸蕃志』の記述から南インド地方においては故臨国が一大貿易地であったことがわかるが、周去非は本文(B)で大食諸國の中では麻離拔国が一大貿易地で、アラブ諸国からこの地に物産が持たらされて交易されたと述べている。本文(E)では故臨国においてと同様に麻離拔国においても金と銀が錢（貨幣）として使用され、大型船、富商が皆集まると言つてゐる。また本文(F)では西暦一〇八八年の十一月に大食麻囉拔国（＝麻離拔）が中国に入貢したことを伝えてゐる。

このように北宋代に麻離拔国が大食諸國の一大貿易地であつたということであるが、麻離拔国等のハドラマウト海岸地方に産する乳香は陸路から象でバグダード地方に送られたという。そしてバグダード地方からさらにスマトラ島の三仏齊国に運ばれ、中国に至るという。たとえば一五一年の葉庭珪『香譜』（陳敬、新纂香譜所收⁽²²⁾）に次の文がある。

『嶺外代答』の麻離拔国と乳香・⁽¹⁾

〔乳香〕以象輦之至於大食。大食以舟載易他貨于三仏齊。

故香常聚于三仏齊。三仏齊每歲以大船至廣興泉。……

これによると、三仏齊——廣東・泉州間の大船による定期航海と三仏齊の繁栄についてもよくわかる。さらに、『嶺外代答』（卷三）、航海外夷の条によれば、大食商人（この場合はペルシャ湾からであろう）が中国へやって来る場合は小舟で故臨に南行し、故臨から大舟で東行し三仏齊に至り、さらに中国へやって来るという。原文は次の通りである。

大食國之來也以小舟運而南行至故臨國、易大舟而東行至

三仏齊國、乃復如三仏齊之入中國。

（三）故臨——麻離拔間の旅程

明、馬歛の『瀛涯勝覽』祖法兒（Zufar）國の條に次の
一文がある。

自古里 Ku-li (Calicut) 國開船投西北。好風行十昼夜可到。其國邊海倚山、無城郭。東南大海、西北重山。國王國人皆奉回教門（マホメット教）。

祖法兒へは故臨（Quilon）の北、古里（Calicut）から西

北の方向に進み、好風十日で至るところ。費信の『星槎勝覽』(紀録彙編本)、佐法児(Zufar)の条には「⁽²⁴⁾廿里國、順風二十昼夜可^レ至」がある。馬歎、費信の記述はともに故臨の北に位置する古里から佐法児までとなっているが、

その間二十日ぐらいと考えていいであらう。祖法児は乳香の產地として有名な所であるが、Mills 出は Salala の東

約2マイル、 $17^{\circ}00'N$, $54^{\circ}06'E$ の Al-Balad or Al-Bilad に位置してゐたといふ。⁽²⁵⁾ Mirbāt(麻離抜)はその東に位置する。『瀛涯勝覽』⁽²⁶⁾ と『星槎勝覽』には麻離抜に類する名称はなじもうである。十四世紀のイブン・バットゥータ Ibn Battūta の旅行記はズハール地方について次のように記している。

〔この町は〕ヤマン Yaman の端にあり、インド洋の沿岸に位置してゐる。そしてインドに高価な馬を輸出してゐる。インダの町 Kālikoūth(=Calicut) と Zhafrā 聞を航海すれば順風である一ヶ月は十分かかる。しかし、私の場合はかつて一十八日間で航海したことがある。その時は風が最適で、夜も昼もやすみなく前進することが

やめたからである。Zafār と Aden 間の陸路とみな距離は砂漠を横断して一ヶ月かかる。Zafār と Hadhra-maout 間は歩行十六日、そしてザフーラー Zafār から 'Omān までは歩行で二十日間かかる。

以上の記事から考えて、故臨——麻離抜間も二〇~三〇日と考えていいのではなかろうか。

亘、アラブ史料から見た大食——廣東間の旅程
九世紀の『中國と印度物語』Akhbār as-Sīn wa'l-Hind (851) に次の記事がある。本稿ではその翻訳だけにとどめ、内容の考察については次稿とその後に発表していく。あたい。

〔中国船のやつて来る場所についてはどうかと詰つて、彼らの大部分はシーラーフ(Sirāf)⁽²⁷⁾ で荷物を積載する。すなわち、シーラーフくはバスラ(Bassorah)、オーマン(Oman) やその他の場所から商品が持たれねるのである。そして中国船に商品が積み込まれるの少しの地〔シーラーフ〕なのである。ところは、この海(ペルシャ湾)では波のうねりが多いこと、さへつかの地點〔地中海航

行のための」水深に欠けるからである。バスクとシーラーフとの間の距離は水路で一一〇パラサンジ (parasanges) ある。シーラーフで商品が積載される、飲料水が積み込まれる。そして「中國船」はオーマンのはづれに位置するマスカト (Mascate) へ呼ばれる地方に〈帆を上ひる〉——これは海の男が使用する言葉で、出航を意味する——。シーラーフからこの地点 (マスカト) までの距離はおよそ二〇〇ペラサンジある。この海の東部、シーラーフとマスターの間にせ Banouç-Gaffâq 海趾と Abarkâvân 島がある。この海にはオーマン暗礁 [地帶] があり、その舟と *Durdur* (= le tourbillon) へ出ぱれる場所がある。そこは一一〇の岩礁の間の狭い水路であつて、小みな船は通過できないが、中国船は「航行」でもない。それらの暗礁の中と *Kosair* (= l'éreinté) やして *Owair* (= le borgne) へ呼ばれる [暗礁] があるが、[両方とも] わずかな部分が海面に現われてゐるにすぎない (ホルムズ海峡に面する Musandam 県の近くの海域である)。それらの暗礁を通過するか、我々 (アラブ人等) はオーマンのソバール (Langabalu, 貢耿『道里記』の婆露國藍伽洲⁽³⁰⁾) という地

(Sohar) と呼ばれる地方に至る。我々はマスカトで飲料水を積み込むが、その地には一ヶ所の井戸がある。あた「その地には」オーマンから持たらされた羊が沢山いる。その地 (マスカト) から各船はインドに出航し、クラーム・マラヤ (Koulam-Malaya, 代答の故臨國) に赴く。マスカトからのクライム・マラヤまでの航路は普通の風で一ヶ月かかる。クライム・マラヤには軍の一守備隊が配属されており、クライム・マラヤ国家に屬している。「その地では」中國船から税金が徴収される。すなわち、その地には飲料水があるが、それは井戸から供給されるのである。中國の「船」からは一〇〇〇ディルハム dirhams その他の船からは一〇から [一一〇] ディナール dinars が徴収される。マスカトから、クライム・マラヤとバルカンニア (Harkand) 海までは約一ヶ月の「旅程」であるが、「このよう」にクラーム・マラヤで飲料水が積み込まれるのである。その後、船はバルカンニアの海に出航する——いわゆる〈帆を上ひる〉——。その海を越えると、ランガ・バールス (Langabalu, 貢耿『道里記』の婆露國藍伽洲⁽³⁰⁾) という地

点に至る。「その地の住民は」アラブの言葉も解らないし、商人が知っている言葉も理解しない。……

それから船はカラ・バーラ (Kalah-vâra, 前述、箇羅国) と呼ばれる場所へ出航する。*vâra* は「王國」と「海岸」という両方の意味を示している。「この地が」インドの右側にあるジャーヴァガ (Javaga) ⁽³¹⁾ 国なのである。一人の王がその権威のもとに全土を集結（統治）している。そして彼らはサローン（腰巻）を着ていて、それは身分の高い人も一般人も同じことである。ただ各自がサローンのみを着ているのである。この地で飲料水を積込むが、それは井戸「水」である。すなわち「この地の住民は」泉の水や雨水よりも、むしろ井戸水を好んでいる。Koulam (Malaya) と「この地」との間の距離は長くはない。すなわちハルカンドからカラ・バーラまで一ヶ月〔の旅程〕である。それからの船はティユーマン (Tiouman, ハニー半島東岸 Endau の東方海上、Tioman 群島) と呼ばれる地点に至る。そこでは欲するならば飲料水が発見できる（きる）、その地に至るには「カラ・バーラ」から十日の

〔旅程〕である。それから船はパンドゥランガ (Pandouranga) ⁽³²⁾ と呼ばれた土地に出航するが、十日〔の旅程〕である。この地でも欲するなら飲料水を発見できる——印度の諸島はでどこでも回りであり、井戸を掘れば飲料水を発見できるのである——。この地にはひとときわ高くそびえている一山があり、時として〔逃亡〕奴隸や盜賊達に隠れ家として利用される。

それから、船はチャンパ (Tchampa, 宋代の占城国。ヴィエトナム中南部地方) と呼ばれた土地に至るが、十日〔の旅程〕である。ここでも飲料水が発見できる。čanfi (=du Tchampa) と呼ぶられる沈香が輸出されるのがこの地からののである。この国には王がいて、住民〔の肌〕は赤銅色である。彼らは各自一枚の布を纏っている。飲料水を積み込むと、Čundurfulat (Île des Tchams, 位置不明、西沙群島 Parcel Islands) と呼ぶられる所に出航する。この地は海の中の一島だ、「チャンパかい」十日〔の行程〕である。この地でも飲料水が発見できる。それから船は中国の門を通過する為に Tchang-Khai (漲海) と呼ばれる海に

出航する。「中國の門」とは、暗礁のことであつて、「暗礁の間は」船が航行可能なぐらゐの間隔がある。神が「我々を」

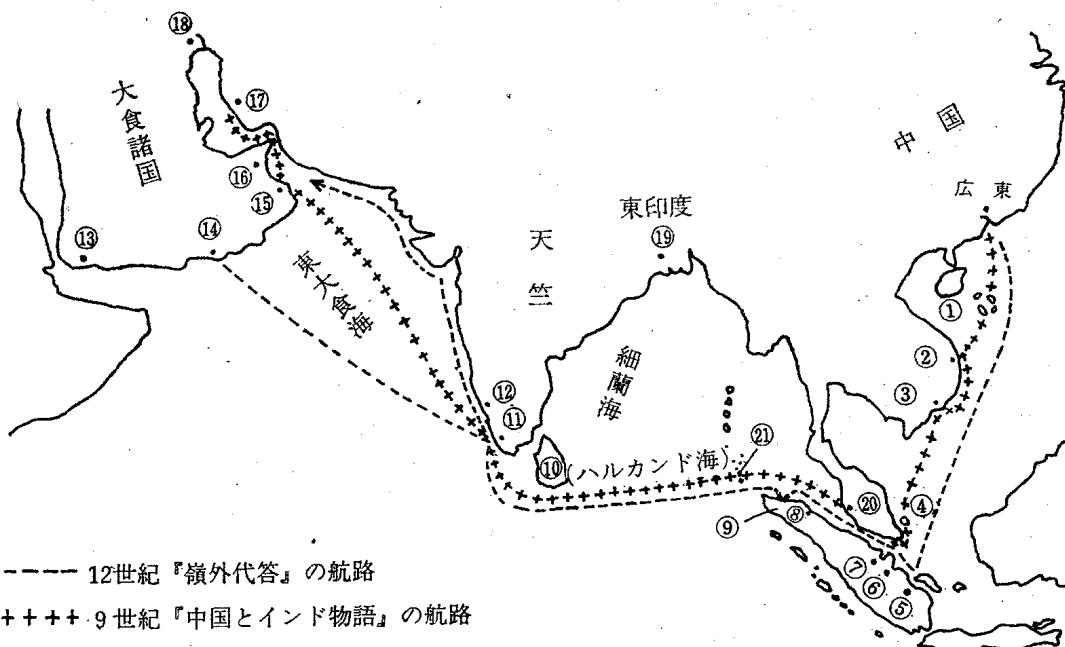
Cundurflatへ無事に恙なく導き給え、船は中国へ出航する。一ヶ月の「旅程」であるが、そのうち七日の間は一定の間隔を置いて続く暗礁の間を通過せねばならない。船が門を通過し、河口に入ると、我々の投錨地である中国の土地で飲料水を「船に」積み込むことができる。「ここが」いわゆる廣東で、一都市である。」

四、むすび

十二世紀の『嶺外代答』によると、一〇八八年の十一月にアラビア半島南岸 Dhofar 地方の Mirbat に位置した大食麻羅拔國すなわち麻離拔國が中国へ來航(朝貢)した。同じく宋、李燾編『統資治通鑑長編』卷四百十七、哲宗の條、七頁裏に「丁卯(一〇八七年)大食麻囉拔國遣人入貢」⁽³²⁾と伝えてゐる。この地は代答卷二に「麻離拔國為大食國諸之都會」と言われるような商業の重要な都市であつたようと思える。それは本文(E)の「巨舶富商皆聚」という表

現からも理解できる。

中国から麻離拔國へ至るには、まづ、廣東を中冬に出航し四〇日でスマトラ島西北端地方の藍里(Lam bri)に至るという。途中パレンバン、ジャンビ等の港に寄港することもあつたであろう。次に、藍里からハルカンドの海を越えてインドの故臨國(Kulam-Malaya)に至る。故臨は当時アラブ諸国とマレー諸島・中国間の一大中継貿易港だったようで、インド東岸地方(注輦國等)に行くのにも故臨で船を乗り換えて至つたという。さらに、三仏齊、監籠、吉陀等のマレー諸島各地から毎年故臨へ貿易にやつて来たという。三仏齊——故臨間の定期航路がすでに確立されていたのである。故臨から中国舶商がペルシャ湾を通り大食國(バグダード方面)に行こうと欲するならば、キーロンでかならず小舟に乗り換えて行かねばならないという。ペルシャ湾航行には大型船が不便であつた為かもしないし、その他の理由があらう。ところがアラビア半島南岸の麻離拔國は當時大貿易港であつたようで、大型船が入港していたというのであるから、故臨——麻離拔國はペルシヤ



---- 12世紀『嶺外代答』の航路

+++++ 9世紀『中国とインド物語』の航路

- | | |
|---------------------------------|------------------------------------|
| ① Cundur-fūlāt
(西沙群島?) | ⑪ 故臨国 (Quilon)
Koulam-Malaya |
| ② Tchampa (占城) | ⑫ 古里 (Calicut) |
| ③ Pandouranga
賓臘隣 (Phanrang) | ⑬ Aden |
| ④ Tiyoman
(Tioman 島) | ⑭ 麻離拔國
(Mirbāt) |
| ⑤ 三仏齊國
(Palembang) | ⑮ Mascate |
| ⑥ 占必港
(Djambi) | ⑯ Sohar (Suhar) |
| ⑦ 甘巴港
(Kampar) | ⑰ Sirāf |
| ⑧ 監範國
(Kampei) | ⑱ Bassorah
(Basra) |
| ⑨ 藍里
Lambri | ⑲ 耽摩立底國
(Tamlook) |
| ⑩ 細蘭國 | ⑳ Kalah-vāra
箇羅國 |
| | ㉑ Langabalus
婆露國藍伽洲
(ニコバル諸島) |

中世インド洋貿易航路略図

湾航行の「小舟」とは異なり、「巨舶」といわれる大型船

も多く就航していたものと思ふ。ゆしゆ、巨舶の中に中國船が含まれていたとするならば、十一世紀あるいは十二

世紀に中國船がアラビア半島南岸まで航行していたことに

なろう。麻離拔國からはアデンや也門に紅海方面、またペ

ルシア湾航行に便利で、アデンやペルシア湾諸國からも小

舟であるいは陸路から麻離拔國にやって来たことである。麻離拔地方の產物である乳香の場合ば、十二世紀中葉

の葉庭珪『香譜』によると、陸路を象で大食(バグダード)

方面)に運ばれ、大食から舟で三仏斎に運ばれたと云ふ。

そして三仏斎からは広州や泉州に毎年大船で運ばれたとい

う。この広東——三仏斎間の定期航路はこれ以前、七世紀

の義淨の頃にもすでに存在していたと思える。また、五世

紀に師子國(セイロン)から耶婆提(本稿ではふれない)

を経て、牢山まで航海した法顯の記述によると、当時すで

にインド商人による師子國→耶婆提→廣東間の定期航

路が存在していたように思える。⁽³³⁾

註

(1) 石田幹之助『南海に関する支那史料』(昭和二十年四月)、一六〇—一六九頁。

(2) Friedrich Hirth and W. W. Rockhill, CHAU JU-KUA: His Work on the Chinese and Arab Trade in

the twelfth and thirteenth Centuries, entitled Chu-fan-chii, Translated from the Chinese and Annotated (St.

Petersburg, 1911), pp. 72-75, 87-89. 「艦圖」の解釈については、桑田六郎博士「諸蕃志の一節——龍腦」(『上野史学』八、一九六二年)、P. Pelliot, "Les grands voyages maritimes

chinois au début du XV^e siècle," *T'oung Pao*, vol. 30 (1933), p. 405. を参照のこと。

(3) 池永桂昭「『諸蕃志』の賓寧國と龍腦・補謫」(『史學』四十八卷第一号)、三七一頁。以下賓寧考・前篇を引く。位置については池永、賓寧考・補謫、附図を参照。

(4) 池永桂昭「『諸蕃志』の賓寧國と龍腦」(『史學』四十八卷第一号)、三七一頁。以下賓寧考・前篇を引く。位置については池永、賓寧考・補謫、附図を参照。

(5) F. Hirth and W. W. Rockhill, *Chau Ju-Kua*, p. 72. n. 1

(6) 藤田豊八「臺灣仏逝三仏斎旧港は何処か」(池内宏編『東西交渉史の研究』、南海篇、昭和四九年)大正二年、六〇—六一頁。航路は『星槎勝覽』の阿魯國、『瀛涯勝覽』の醒魯國、トメ

・ルネ『東方諸國記』のトハ (Daru) 國。位置については、池永、賓率考・補論の附図参照。

(14) 桑田氏、前掲、南趾考、14頁。アニヤ氏(註31)、11回11頁

参照。

(15) 生田滋訳・注、池上玲夫訳、加藤栄一訳・注、吳國新治郎 訳・注『ルメ・ルヌ東方諸國記』(一九六六年)、1177頁、1177—1178頁・注(34)。

(16) G. Coedès, *Les Etats hindouisés d'Indochine et d'Indonésie*, nouvelle édition revue et mise à jour (Paris, 1964), pp. 155-156.

(17) 桑田氏には前掲、桑田博士「諸蕃王の「籠——國書」」(『山陽史学』)、一九六三年) を参照のこと。

(18) 桑田大麿「南洋上代史雜考」(大阪大学『文学部紀要』第11卷、昭和二九年)、112(118) ——117(119) 頁。

(19) 前掲、F. Hirth and W. W. Rockhill, *Chau Ju-Kua*, 年報》第三輯、昭和十一年)、110(38) ——111(39) 頁。

p. 98, n. 1.

(20) Coileam さタマーラ・庫ラム、ルンヘン・ルンガス。 Paul Pelliot, *Notes on Marco Polo, ouvrage posthume, publié sous les auspices de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres et avec la concours du Centre national de la Recherche scientifique* (Paris, 1959), vol. I, pp. 39-

402.

(21) Aldo Ricci and E. Denison Ross, *The Travels of Marco Polo, translated into English from the text of Pāṇini's Pāli 説 Tāmalitti の校讎*、唐の玄奘『大唐西域記』卷十の「耽摩栗底」、義淨の『南海歸國法華』卷四と『大唐西域記』卷十一の「耽摩立帝」はサンスクリット Tāma.

(22) Hoogly 沢口の Tamlook 地方に位置した國。五世紀の法顯の時代にはヒル・ロクヒル両氏の見解のよきに東南ア

ジア諸國との貿易の主たる中心地の一つであつたと思ふ(前掲、*Chau Ju-Kua*, p. 27.)。法顯の「多摩梨帝」は杉本博士による Pāli 説 Tāmalitti の校讎で、唐の玄奘『大唐西域記』卷十の「耽摩栗底」、義淨の『南海歸國法華』卷四と『大唐西域記』卷十一の「耽摩立帝」はサンスクリット Tāma.

lipti の音訳であるところ(日本直治郎『東洋考古学研究』)。ア・史研究』、昭和11年、11回1—11回11頁)。

(23) 前掲、F. Hirth and W. W. Rockhill, *Chau Ju-Kua*, p. 12, n. 5.

(24) 前掲、F. Hirth and W. W. Rockhill, *Chau Ju-Kua*, p. 25, n. 3.

(25) Aldo Ricci and E. Denison Ross, *The Travels of Marco Polo, translated into English from the text of Pāṇini's Pāli 説 Tāmalitti の校讎*、唐の玄奘『大唐西域記』卷四と『大唐西域記』卷十一の「耽摩立帝」はサンスクリット Tāma.

L. F. Benedetto by Professor Aldo Ricci, with an Introduction and Index by Sir E. Denison Ross (London, 1931), p. 327.

(22) 葉庭珪の書にては和田久徳氏「薩藩香鑑心譜叢書」の

関係（お茶の水大学『人文科学紀要』第十五卷、昭和三十七年）に詳しき。

(23) 馮承鉤、瀛涯勝覽校注・中華民国二十四年（一九三四年）十一月三日一五三頁。

(24) 馮承鉤、瀛涯勝覽校注・後集・中華民国三十七年（一九四八年）一九頁。

(25) J. V. G. Mills, MA HUAN: *Ying-Yai Sheng-Lan, The Overall Survey of the Ocean's Shores.* [1433], translated from the Chinese text edited by Feng ch'eng-chün with introduction, notes and appendices (Cambridge, 1970), p. 151, n. 2.

(26) C. Defrémy et le Dr. B. R. Sanguineti, *Voyages d'Ibn Batoutah, texte arabe, accompagné d'une traduction* (1892), 2 vols, p. 196.

(27) J. Sauvaget, 'Akbār aṣ-Ṣīn wa'l-Hind: Relation de la Chine et de l'Inde, rédigée en 851' (Paris, 1948), pp. 7-9.

藤本勝次訳注『シナ・ペルシア物語』（慶應大學東西洋學研究室所、訳注ハラーハー、一九七〇年）+一一一頁。G. Ferrand, *Relations de voyages et textes géographiques arabes, persans et turcs relatifs à l'Extreme-Orient du VIII^e au XVIII^e siècles* (Paris, 1913-1914), vol. II, pp. 35-46. 本稿ではハラーハーの訳注をもつて、藤本氏の原典翻

【編外文庫】の麻糸抜きと同様・丁

訳文とフローラン氏の訳・注を参照した。

(28) 之の「中國船」の解釈にて、ヒルム、ローリー、ローリーの訳文とフローラン氏の訳・注を参照した。

は「(トライア史料に據る)中國船が中国人所有のもの、あるいは中國人によって航海された、ひととしも若くやれなことである。十二世紀の末になるとアラムやシーラフの名称の中

國人に記載されたことなかつた。」アルマニ（訳者、*Chau Ju-Kua*, p. 15, n. 3.)。G. Hourani 氏等の訳を改め入れられ

ハラーハー、トライア史料に據る *marākib al-Ṣīn* (ships of China), *sufun Sīniyah* (Chinese ships) とは西方人(トライア人等)の船を意味する「中國貿易に従事する船」のハラーハーである。G. F. Hourani, *Arab Seafaring in the Indian Ocean in Ancient and Medieval Times* (Princeton, 1951), pp. 75-76° トライア、九世紀の『中国とペルシア物語』の書では中國の船がペルシア湾にやへてへるとなかつたむらべて既解である。これがどうしてこうした、該訳書に出「ペルシア洋通商ヒュメン——南アラビアの Sirāf 距離地——」(トライア・アフリカ言語文化研究)、一九七一年、一一一頁。曰氏

「15世紀におけるペルシア通商史の一齣——歐和遠征分隊のトライア訪問」と云ふ——」(トジア・アフリカ言語文化研究)ハメハメ訪問といふ——」(トジア・アフリカ言語文化研究) 8、一九七四年、一一一-一三八頁。藤本氏、前掲、『シナ・ペルシア物語』、八〇-八一頁、を参照の上。本稿ではやれな

(29) Sirāf は İstakhrī が著した書物の十世紀にさるハラーハー

ト湾にわたり一大貿易ヤンタードおいた。アシド Mukaddasi (十世紀) によれば Basrah と貿易上競つたが、九十七年あるこせ九十七年に起つた地震によつて一部が破壊され、また Buyid 騄の没落と並んで振山つたといふ。G. Le Strange, *The Land of the Eastern Caliphate, Mesopotamia, Persia, and Central Asia from the Moslem conquest to the time of Timur* (London and Liverpool, 1905, Third Impression, 1966), pp. 258-259., Arnold T. Wilson, *The Persian Gulf, an historical sketch from the earliest times to the beginning of the twentieth century* (London, 1928, third impression, 1959), pp. 94-95.

参照。ハーネットヒュント、ゾロアスター、前掲、「マハッ洋通商」に詳しつ。

法顯のいう「南人大船」はすでに桑原博士のいわれるようないンド船かマレー諸島船と思え、一艘の乗員は約一百人という大型船であった（桑原隱藏『蒲寿庚の事蹟』、桑原全集、卷五、昭和四十二年、101—105頁）。

(30) 池永、賓春考、前編、三七一三六頁。
 (31) 『諸蕃志』の賓腫龍國、『嶺外代答』の賓腫龍國。『平唐書』(卷一九七)、真臘の条に奔陥浪洲とある。現在ヴォルナム南部の Phanrang 地方と叫ばれ（前掲、*Chau Ju-Kua*, p. 51）。P. Pelliot, "Deux Itinéraires de Chine en Inde, à la fin du VIII^e siècle," *Bulletin de l'Ecole Francaise d'Extrême Orient*, IV (1904), pp. 216-217. 参照のくじ。
 (32) 國史大藏第1類書、第十一册、中華民國五十一年（一九六四）。

(33) 法顯『仏國記』は、前掲、大正新修『大藏經』によつた。

執筆者紹介

高瀬弘一郎	慶應義塾大学文学部教授・文学博士
柳田利夫	慶應義塾大学院修士課程修了
鈴木正崇	慶應義塾大学院博士課程
松本信廣	慶應義塾大学名誉教授
伊藤清司	慶應義塾大学文学部教授
和田博徳	慶應義塾大学文学部教授

(昭和五十三年四月現在)